

## 座談会

## ソーシャル・イノベーションの最前線

司会 井手 英策 (慶應義塾大学教授)  
 中島 康晴 (特定非営利活動法人「地域の絆」代表理事)  
 大島 明子 (社会福祉法人アルペン会「あしたねの森」事務局)  
 伊藤 暁 (伊藤暁建築設計事務所)  
 井筒 耕平 (村楽エナジー株式会社代表取締役)

(敬称略)

## ソーシャル・イノベーションのいま

井手 「ソーシャル・イノベーションの最前線」というタイトルですが、趣旨は二つあります。ソーシャル・イノベーションを日本語にすると社会変革ですが、その社会を変革する担い手を社会的起業家と呼んでいます。皆さんはソーシャル・イノベーションを意識しているし、その担い手という意味で社会的起業家でもあると思います。

社会を変えなければならないということは、社会に何か問題があるということです。あるいは変えなければならない社会だから、社会を変革しようと皆が思う。その変えなければならない社会、解かねばならない問題とは何なのかを聞きたいと考えています。

もう一つ、戦後日本が豊かな時代を含めて、リベラルや左派の人達は、危機だと言いつけてきました。そういう危機とは異なる、戦争中の危機とも違う、リアルな危機が今起きているのではないかという気がしています。その時に左派やリベラルが何を発言すれば良いのか。今まで危機だと言いつけてきた一方、危機はなかなかやってこなかった。ところが、今本当に危機だと何となく皆が思い始めているときに、沈黙する人が増えている。さらに深刻なことに、左派やリベラルが発言すると大衆がそれを拒絶する、格差是正とか理想を掲げた瞬間に皆が冷た

い目でそれを見るという問題がある。

皆さんは、担い手として社会を変えたいという想いをどこかお持ちだと思うのですが、一方で、社会をつくっているほとんどの人達が、それを実は冷たい目で見ています。このギャップを、どうやって埋めていったら良いのだろうかということも考えてみたいのです。

まず、皆さんがどういうことをやっておられるか、どういう想いでそういうことをやっておられるのかも含めて聞かせていただけて良いでしょうか。

中島 社会福祉実践家が為すべきことは、権利擁護の実践だと言われています。権利擁護とは、権利侵害を防止することと、人びとの自己決定、自由を尊重するということが言われますが、もうひとつ、三つ目に重要な要素があって、先の二つのことを実践するために社会環境を整える、社会を変革していくということがあると考えています。ソーシャルワークとか社会福祉実践の領域では、理論的に社会変革の重要性は言われているのですが、実践ベースで社会変革の実践を意図してなされているものはなかなか見当たらないので、そこを一つの課題と捉えています。社会福祉実践家として社会変革を意図した実践を率先してやろうと思ったのが起業の一つの動機です。

社会変革というと、実践レベルでどうそれを達成して良いかがわかりにくいのですが、個別支援をし



中島 康晴 氏

ている私達の最も身近な社会環境は、地域社会だと捉えられます。ですので、個別支援を通して地域をいかに変えていくのかというところを意図してやっています。いろいろなやり方があると思うのですが、地域住民に対して、

障害のある方に対する理解や協力を促進していくということが最も重要で、それを行っていくために有効な方法ではないかと考えているのが、社会教育学でいうところの状況的学習、体験的学習です。

体験的学習、状況的学習というのは、興味はなかったけれど、やっているうちに興味がわいてくるとか、そのことの社会的重要性は認識していなかったけれど、やっているうちにその重要性を認識するに至ったとか、体験や状況の中で住民が自らそこに参加することによって、いろいろなことに気づいていくという学習です。多様な人達同士が集って、共に参加しあって活動をする場をつくっていくというのが、私達がやっていることです。

障害のある方や認知症のある方と、そうではない人達との接点の場をたくさんつくっていく。そのことによって地域住民の体験的学習を促進していくことを、地域変革としてやろうとしているところです。そのことによって、地域住民に対して障害や認知症の問題をより身近なものとして捉えていただいて、さらには自らのこととして実感していただくというところまで行き着ければ良いなど。

結局、最大の問題は、排除されている人達がいるということです。障害のある人や認知症の人たちなど、誰もが排除されない地域社会をつくっていくために働きかけるということです。

**大島** 私は、富山で「あしたねの森」という施設のプロジェクトに関わっていて、高齢者施設と保育園、この4月からは学童保育と障害児のデイサー

ビスが同じ敷地にある場所づくりに携わっています。今の福祉の問題で感じるのは、福祉に関わる人達も当事者意識がその分野だけに偏っているということです。保育の人は保育のことしか考えていないし、介護の人は介護のことしか考えていない。そうではない人がいることは承知していますが、障害のことに関わっている人は障害のことしか考えていないという傾向が強いと思います。

福祉に関わっていない人の場合は当事者意識のなさがもつと強く、自分の親が認知症になってから慌てふためくというような事例がたくさんあります。そういう意味では、「あしたねの森」という場所は、保育分野や高齢者分野、障害分野の複合施設ということで、職員がいろいろな接し方を学ぶことができるし、高齢者とは話せるけれども子どもとは話せないという人が、積極的に子どもと関わらざるを得ない状況をつくるなどして、職員の意識がまず変わっていける場所ではないかと思っています。

ここでいう「福祉に関わる人」とは職員だけではありません。利用者、その保護者と言われる人、高齢者を在宅で支えている家族も、高齢者のことは分かっている、障害のことはまた別のものと思っているところがある。でも人間は生まれてから死ぬまでいろいろなことがあって、障害を負うこともあるだろうし、病気になって内臓疾患的なことで弱くなることもあれば、認知症のように頭の中の問題が発生することもあるのだけれど、皆が違うものだと考えている。

人間トータルで考えたらいろいろなことがあるのだけれど、どんなことが起きても大丈夫だよねと、「あしたねの森」に通っている利用者さんや周りの人たちはドンと構えていられるんじゃないかと思います。保育の保護者だって、なにが起きてもこうやって支えてくれる人がいるのだと学び、今までにはない安心感をもって子ども達に接することができるのではないかと考えています。

社会変革という意味では、「あしたねの森」には子ども達がいるということが一番の特徴ではないかと思います。高齢者の方の尊厳をスタッフが尊重してケアしているという場面を見ることによって、子ども達は、高齢者は尊重されるべきだし、自分もそう

やって尊重されるべき存在なのだと、自己肯定感をもって社会に飛び立ってくれば良いなという夢を持って仕事しています。

**伊藤** 私は徳島県の神山町という中山間地域で建築に関わる仕事をしています。大きく分けると私たちが神山町でやっていることは二つあって、一つは通常のクライアント・ワーク。もう一つは、誰にも頼まれてないけど、勝手にワークショップやリサーチなどをやっています。

最近様々メディアで取り上げられていますが、神山町にはサテライトオフィスを構える企業が進出してきていて、クライアント・ワークではそういった企業や、現地NPOのグリーンバレーの要請に応えることをやっています。空家を改修してオフィスにしたり、新築を建てることもあります。最近では宿泊施設を建てるという仕事もやっています。

頼まれないのに勝手にやっているワークショップは、主に夏休みに10～20人ほどの人を集めて、街の中にかる劇場の再生計画を考えたり、家具を作ったりするような企画をやるというものです。具体的なプロジェクトが動いていたり、予算がついていたりということとは関係なく、「こういうことを考えたら面白そう」とか「こんなものがあつたらいい」ということを、街の人たちと一緒に考えるきっかけ作りのようなものかもしれません。

クライアント・ワークに関しては、当たり前ですが何かしらの与件がありますので、それに対していかに場所にあった答えを見つけていくかということが主題になります。例えば、たびたびメディアで取り上げられている「えんがわオフィス」、これは築80年くらい古民家を改修して東京に本社のある映像関連企業のサテライトオフィスにしたものです。一日中パソコンに向かって仕事をするようなワークスタイルで、今まで街になかった風景なので、それが街の人たちとどのような関係をつくったら良いのかを考えました。何が行われているかがわかって、ふらっと遊びにも行ってしまうような、そんなオフィスがあってもいいのでは、外から来た人と、町にもともと住んでいる人たちの関係を空間的にどう解決するかと

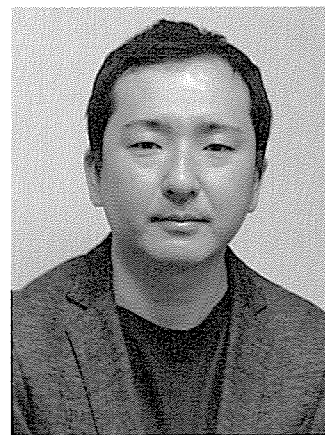
いうことを考えています。

そこで、中で働いている人たちが何をやっているか分かる方が良いだろうということで、外壁をすべてガラス張りにしました。そうすると中の人達には外の景色が見えるし、まちの人達は中で何をやっているかが何となくわかる。

だけど、単にガラスを一枚建てただけだと、そこはかなりはっきりした境界になってしまい、強い線が引かれてしまう。そこで建物のまわり四辺に幅2.5メートルくらいの広い縁側をつくったのです。すると、どこが境界かだんだん分からなくなってきて、社員の人はそのにお昼ご飯を食べに出たりするし、まちの人でも採れた野菜をもって差し入れをしてくれるようなことが起きた。境界の幅をできるだけ広げて、そこで地域の人と働いている人達が接点を持てるような空間をつくっています。

もうひとつの勝手にやっているワークショップは、多くの人に関心や関わりを持ってもらえるようにやっています。例えば、街にある古い劇場の再生案を考える。「勝手に案を考えたんですけど、これどうでしょうか？発表会やるので聞きにきて下さい」と街の人に集まってもらおうと、別に何の現実的根拠も無い話なので、皆好きなようにコメントしてくれる。突然「予算がつかました!」と言って改修案が登場したらびっくりして反対意見も出てきたりするんですけど、「勝手にやってます」というスタンスだと気軽に発言できるし、ちょうどいい具合に頭の体操になります。もしも本当に改修することになった時は「あの時こんな話をしたなあ」ということがベースになるというような、前向きにことを進めるための練習にもなるわけです。

クライアント・ワークと勝手にやっているワークは、混ざり合っているようなところもあって、そこをどう絡められるかが一番おもしろいところだと思って



伊藤 暁氏



井筒 耕平 氏

います。どんな仕事でもその「絡まり代」をどうつくり出すかということを考えていますね。

**井筒** 私は岡山県西粟倉村という人口1500人の村で、村楽エナジーという会社をやっています。

事業は三つあって、一つは、村にある温泉に導入する薪ボイラーのコーディネートです。計画からはじまって、導入、具体的に言うと、業者選定、基本設計、工事監理まで。最後に、導入したら薪をつくって運搬して投入するところまでやる。それが一つの事業です。

二つ目は、これは4月からやるのですが、温泉です。温泉も竈があったり薪ストーブがあったり、秋には薪ボイラーが入るのですが、普通に温泉だから皆が来るのです。そういう人達が、こんなところに薪ボイラーがあるのだとかさらっと知ってもら。子どもが来られるようなゲストハウス、高齢者も介護予防事業を通じて自然と来る。そこで自然と地域の子どもとお年寄りが混じり合う。そういう、縁側に近いような大きなデッキがあって、そこで子どもが遊んでいるのを中から眺めて、お母さんがお茶を飲むというような、そういうものもあっても良いのかなと。

三つ目は、村の中だけではなくて特に外なのですが、昔からやっているコンサルティング事業です。主に自治体向けですが、今普通にコンサルはたくさんいるのですが、事業をやっていない人達がほとんどで、事業をやっている人達でコンサルができる人となるとなかなかいない。それは価値だと。やはり薪ボイラーを入れましようと言った時に、どれくらいの重さかとか、運搬にどれくらい時間がかかるか、薪を割るのにどれくらい時間がかかるか、お金はどれくらいかというようなリアリティ。お金と人間の体力といったリアリティですね。

あとは、バイオマスというとすぐにエネルギー利用

となる。本当は林業ありきのはずなのに、そこら辺が全然説明されていないというのは、コンサルが抜けているところです。林業が動いていないとバイオマスを使えないのですが、それはほとんど語られていない。想いの部分については、これらは全て手段とっていて、別にバイオマス事業をやりたいからやっているというよりは、それを通じて、持続不可能になりつつある田舎での暮らしの構造的な問題の部分、お金とものの流れの部分、テクノロジーはいっぱい入って来ているからそれは使うのですが、地域の資源で、人工的な資源も自然の資源も全く使われていない資源が今やたくさんあるので、それを使いながらちゃんとビジネスする。

やはり私達が新しいインフラになっていくことではないかと思っています。中でもソフトインフラの部分ではないかと思っているのですが、うちの会社はものをつくらないのです。エネルギーだけでなく、宿泊施設や観光施設、あとは子どもやお年寄りが来られる場所、視察ツアーを受け入れるといった新しいニーズ。「ものづくり」ならぬ「ことづくり」と呼んでいます。様々な分野にわたっているものを一括して、「ことづくり」という事業をやっています。

宿泊施設、観光施設といえば、ハコモノ的に聞こえるかもしれませんが、でも、宿泊、観光については、一般的な宿泊や観光ももちろんあるのですが、例えば視察ツアーを含めての宿泊をやるとか、体験型もあわせてやっています。結局、むらにやりたいことがあって、それがむらに必要なだと思っている人達がいるのにやり手がいないという問題かなと。地域おこしとかローカル・ベンチャーと私達は言うのですが、そういう存在から、もう少しインフラを「担う」存在価値の高い存在になっていく必要があると思っています。

## 縦割り行政が「公共」を歪める

**井手** お話をうかがっていて、明らかに共通する点がありますね。見えるようにする、発見する、気づくということ。障害の問題もそうですし、老いるということもそうです。見えるようにするということと関係

して、人と人が出会う場をつくっていくということが共通しています。先ほどの縁側の話もそうだし、温泉の話もそうだし、人が出会う接点をつくる。良い表現だと思ったのが「境界を広げる」ということ。境界線というすごく細い線に思えるけれど、そこを広げて「グレーゾーン化」していく。

また、単に接点をつくるだけでなく、そこに人間と人間が関わって行って、その中で問いが発見されていく。皆が何を必要としているかが発掘されていく。中島さんの体験的学習とか状況的学習は、出会うの場をつくり、人が関わり、いろいろなことが見えるようになる中で、リーダーではなく皆が学習していくということですね。

じゃあ、みんなが学習していくことに対して、それを阻むような要因や、あるいは逆にうまくいさせる要因にはどのようなものがあるのでしょうか。学習が大事であることは分かりました。その学習や人の出合いを阻むもの、あるいはそれをつなげたもの、何か体験的におありであれば教えてください。

**大島** 昔から言われている役所の縦割り行政ですね。うちの施設でいえば、やはり保育と介護を同じ敷地につくるということはすごくいやがられたし、こちらとしては効率的だろうと思って厨房を一つにしたいのに、それは法律で、保育にも一つ、高齢者にも一つつくりなさいという指導があって、それで逆に建設費がかかった。入り口も障害児が通う施設と学童の子が通う入り口は別にしなさいとか。普通の子に、障害児と入り口が違うのだと言えということかと、内心思いました。福祉行政は役所が関わる部分が大きく、その関わる役所の人達が悪気なく言っている分、なかなか伝わらない部分があるかと思えます。

**井筒** 心地良い感じの「仲間意識」のような部分、コミュニティに関わるのが良いことだというような部分に偏りすぎているというか、コミュニティ化されていることしかダメだという意識というか。例えば、ゲストハウスには子どもを連れていったらダメというところがたくさんあるのです。それは子どもがいたらう

るさいからというのですが。それは確かに心地よくてほめられることかもしれませんが、一方で混沌とした状態もそれはそれで良いということも思い合っていない。どちらも良いのだというふうにはちゃんと客観視していないのではないかと思います。

でもこれはむらの意識だけじゃないんです。むらはまだカオスな状態を受け入れやすいのですが、都市の方が人口がたくさんいるだけに逆にコミュニティ化されやすいのではないのでしょうか。

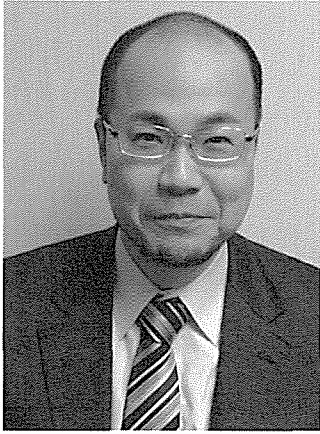
**大島** 場所に機能がくっついてしまって、子ども部屋や居間のように。介護施設も、介護保険利用者以外は使ってはならないという建物になっていて、デイサービスの利用者が帰った後に夕方空いているからそこに子どもが来ても良いかという、役所の人はダメだという。

**中島** 縦割り行政の問題ですよ。全ての社会福祉サービスが、市場原理化しているというか民間委託化している。民間委託化していくと、自由な発想で自由な取り組みができるはずなのに、むしろ逆になっていて、行政が指導権限を発揮することによって、自由な方法が画一化され奪われているのではないかと感じます。

指定管理者制度もそうなのですが、結局は民間に委託するけれど自由にさせない。プロポーサルや公募で行政の言いなりの中身を民間にさせる。それならば行政がやれば良いではないかという話ですが、それは人件費とかいろいろな関係の中で委託した方が安上がりになるということなのです。民間委託したからといって、民間の自由な発想が活かされていない。それは福祉の現場に直結して言えることではないかと思えます。



大島 明子 氏



井手 英策 氏

**井手** セクショナリズムの二面性ですね。ひとつは行政。もうひとつはコミュニティのもつ分断性。しかも、コミュニティといった時には、先ほど出た都市的な、中でも居心地の良い人びとの集団ができるという新しいコミュニティの話も出ました。むらやまちが人を排除するという側面について、失敗事例だけではなくて成功事例を含めて何かありませんか？

**伊藤** キッズカフェだから子供だけですか、高齢者施設に子供を連れて行っただめだというのは「ここは子供部屋」「ここは支援室」というように、場所に名前をつけてその機能に特化して作り上げていくという考え方です。でも、その名前と使い方の関係の根拠がかなり古い時代、例えば奥さんが家において旦那さんが外で働いて子供は何人で…というもののまま止まってしまっています。前提となる家族構成や生活スタイルが変わってきているのに古い根拠に依存してしまうのは、基礎が無い上に家だけが建っているような状態で、そこで様々な齟齬が起こっている。

**井手** 例えばお母さんが家に居て、お父さんは働きに行っただけ、子どもは必ず3人いるというようなモデルが前提になって、家の中には何々部屋があつて何々部屋があるということですか。

**伊藤** 家もそうだし、例えば都市にどういう施設をどういうふうにつくろうかという計画をする時に、キッズスペースをつくろうとすると、専業主婦のお母さんが子どもをつれて遊びにくる場を考えるとそこからスタートしてしまいます。でもそこにはひよつとしたらお婆ちゃんが子どもを連れてくるかもしれないし、お父さんが連れてくるかもしれない。だとすれ

ば、場所のつくり方、空間のつくり方が変わる、もしくはどういう場所にそういう施設があつたら良いかが変わるはず。いろいろな与件があるはずなのに、とにかくキッズスペースをつくりましょうと言った瞬間に、「ではお母さんの居場所はここで子どもはこっちで、こっちで遊んでいるからお母さんお茶が飲めますね、以上！」となって、お父さんが子どもを連れていこうと思っても、ちょっとあそこは入れないという感じになってしまう。

これに行政の問題が加わる。どういう形で生活を営むかという有り様はすごく広がっているのに、それに計画なり行政のルールなり、いろいろなものが追いついていない。最近はあるスピードがかなり速くなっているので、そのギャップがどんどん広がっている感じがします。だから、高齢者施設と児童福祉を一緒につくろうと言っても、キッチンそれぞれ一つずつというような謎の指導が入ることが普通に起こるわけです。その辺はもっと変えていかなければならないところだと思います。

役所の人も馬鹿ではない。ただ自分達は法律を破って良いですと言うわけにはいかないの、そういう決まりですという話になる。その決まりはいつできたんですかと聞くと、「1950年です」と。「昔すぎるよ！」ということがいたるところで起こっているのがやっかいです。

**大島** 厚生労働省の方に、あしたねの森の話をしたら、高齢者側は子どもといることは喜ぶけれども、保育園の保護者から高齢者と一緒にいることについてクレームはないですかと聞かれて、いや全くありませんという話をしました。東京等の都市部では、高齢者施設が隣にあるとか障害者施設が隣にあるという、それにクレームが出る。

**伊藤** 「公共」という言葉がすごくゆがんでいて、クレームが出ないものをつくるのが公共だという。それは完全に間違っている。

## 人間の「関わり方」が変わりつつある

**井手** 何をすべきかというよりも、どうすれば批判されないかという基準で「公共」を考えている。家族モデルが崩れているというのはすごく重要で、社会の根底にある家族像が本当は変わっているのに、社会が、行政がそこうまくマッチできていないという問題があるわけです。僕の専門である財政でも同じことがいえます。

じゃあ、コミュニティはどうなのでしょう。家族モデルだけではなく、コミュニティの前提としてあったもの、若者がいるとかご近所さんがサービスを代替するとか、ここも崩れていっていますが。

**伊藤** コミュニティという何かすばらしいもので、それを持続させなければならないというような論調がすごく多いのですが、多分、コミュニティはもともとすごく面倒くさいものだったと思うのです。一緒にやらなければ生活が成り立たないから仕方なく皆と一緒にやる。だけど技術が発達していくと、お隣さんの手を借りなくても生活のほとんどの部分は成立してしまうようになっていって、付合うことの必然性が薄れているのに、コミュニティの礼賛だけが先鋭化しているように感じます。

ただ、最近またちょっと時代が変わってきた。単純な互助ではない共同体のあり方も出てきているし、僕も改めて「近い同士」でどういう関係を築くかということをかきんと考えるべきだとは思いますが。でも「面倒くさい」という前提を忘れてはならない。美談的に語られ、その結果妙な同調圧力ばかりが跋扈して、結局疲弊して人が減っていきそうな動きが多いのは心配です。

**井手** 共同性みたいなものが重たい負担になって、一時期どんどんと遠ざけられていって。今の話だとやはりそれがなければダメだよねという部分も出始めている、でも諸手を挙げては受け入れられないという話ですね。

**伊藤** インフラの維持管理が象徴的かつ具体的な問題で、例えば豪雪地帯は雪かきをしなければならぬけれど、3人しか住んでいないところに誰が雪かきをしにいくんだ、とか。一応人が住んでいるし、上下水道のメンテナンスとか、バスを走らせるのかやめるのかなどといった時に、それがコスト換算されて、コンパクトシティみたいな話が生まれてきます。人口は減っているから、どこかはなくなるということも見据えて地域社会のありかたをデザインしていかなければならない時代です。

特に行政はマネジメントを担わなければならないので、ドライに取組まなければならない問題であることは事実です。だけど住んでいる人に対して、「あなたのところ切るからね」とは言えない。同時に、ある地域を越えた、例えば、ここで林業をやる人がいなくなると山が荒れて、その山が川を汚して下流の人びとに被害が出るというように、どういう射程で語るかによって如何様にも解釈できる、つまり一概に答えが出せないという前提を共有しておく必要あるでしょうし、全てを行政に頼るだけでは対応できない問題だと思います。

**井手** 井筒さんに聞きたいのですが、地域を切るという動きは確かにあるわけです。今の「地方創生」も選択と集中のような発想があって、過疎地域は切った方が良いという動きも確かにある。その中でずっと一生懸命やってきた人達、何年も何十年も目の目を見ずに頑張ってきた人達がいるわけです。切るとか切られるとか誰かが言ったとしても、この人達は生きていかなければなりません。「地域を越えて」と伊藤さんは言ったけれども、今までであればコミュニティで問題を解決するけれど、コミュニティ性、共同性をもう一度強めようとしても、家族構造も変わっていれば状況も変わっていて、人も減っているという中ではできない。でも人間はしぶとく生きのびようとするわけです。現実にはどんなことをやっているのでしょうか。

**井筒** 「あんたもう出ていきなさい」というふうの外から言われるとか、あるいは、「あんた達が考えない

ともう無理だよ」と言われたって、結局決めるのはすべてそこに住んでいる人しか決められないので、残したいと思うかどうかに究極答えがあるのではないのでしょうか。全員が思わなくても、一人がとにかくここは残そうよという話を言い出して、ああそうかもと思いついたらそうなるかもしれない。

**井手** そんな中で、例えば井筒さんは外から入ったわけですね。昔のコミュニティであればこういうことはないと思うのです。よそ者でしょう。それを受け入れようというすごく大きな変化を感じます。

**井筒** そうですね。自分では漠然と思っているけれど、どう行動したら良いか分からないとか、どういう手段があるのか分からないといった時、新しいチャレンジをどんどんやってくれる若い人達がいるならば応援してあげるといふ感じですね、うちの周辺は。

**井手** それは西粟倉村がたまたまそうなのか、それとももう、生活や生存の困難に直面している人達はそうなりはじめている、ならざるを得ないのでしょうか。

**井筒** 岡山県は、結構、新しい人のチャレンジを受け入れています。ヤバいねという危機感が何となく全般的に田舎の方にも浸透していて、新しいチャレンジはどんどんやってくれというのが浸透しています。最初は、排他性はあるのかなと思っていて、実際、2000年代前半はそう感じていたのですが、だんだんと。世代もどんどんあがっているから、文句を言ったところで、ならば誰がやるのか、動けないでしょうと。

**井手** ソーシャル・イノベーションという時に、それを皆さんが「起こす」という方向もあるのだけれど、実際に社会がイノベティブに変わっていつているということ。明治以来続いてきたむらの排他性がとうとう払拭されはじめているというのはすごい変化です。

**井筒** それはすごく感じます。地域おこし協力隊は1000人いますが、最初は協力してあげようと皆地

域の人達は思う。ただその中には期待はずれとかいろいろなことが起こってくるわけですが、最初はウェルカム。ウェルカムだから協力隊を募集しているわけです。

**井手** 中島さん、都市部ではどうでしょう。広島で、地域の中で社会福祉を実践するというのをやっておられるけれど、地域の人達は、中島さんの取り組みをずっと受け入れてくれていますか。それともいわば迷惑施設的な扱いで、そんなもの来てくれるなという排他的な雰囲気があるのですか。

**中島** 8拠点でやっていますから地域性によって当然変わってきますが、多いのは、自分達の生活を監視するかのように認知症の人が事業所の中からのぞき見てくるが、認知症のある人に見られたくない。認知症のある人のまなざしを拒絶する近隣住民は非常に多いです。だから目隠しフェンスをつくってくれと。

当然、うちの法人の理念としては真逆のことなので、それはできないわけではないけれど、極力したくない。圧迫感も出てきますし、居住空間としてどうなのかという問題も出てきますから、できればご遠慮いただきたい、ご理解していただきたいと言うけれど、やはり最後のせめぎ合いのところ、どうしても何らか圧迫感のない形で、お互いが譲り合えるようなものを設置しなければならないということがあります。

一番のポイントは、地域住民と関係をつくって、それを継続していくこと。その方々に、例えば足湯に入りきってもらったり、地域交流のスペースがありますから、その案内をしたり、2ヶ月に1回の頻度で、ずっと回覧板を流し続けたり。年に3回くらいイベントをやっているのですが、イベントのたびに必ず声をかける。来るか来ないかは別として、継続してやっていくことが大事です。こうして、はじめの頃の排除感はなくなりました。

**大島** 「人間」として必要なことをやっているというのもあると思います。ただ営利だけを目的にしているわけではなくて、人生のステージの中で、いわ



ば困った状態になった人に対してサービスを提供しているのです。そういった意味では、もしその隣の人  
が困った状態になって助けたとしたら良い関係になる  
だろうし、そうではなくても誠実に仕事をしていれ  
ば分かってもらえるというところはあります。

**井手** 中島さんと大島さんは比較的都市部なわけ  
です。でも、同じ都市とはいっても、富山は排他性が  
強いですよ。福山とはだいぶ違うと思うのです。そ  
の中で巨大な複合施設をつくる。そのことに対する  
地域の人びとのプレッシャーはあったのではないで  
すか。

**大島** たまたま「あしたねの森」ができた場所は、富  
山市の中でも高齢者施設を何十年来望んでいたけ  
れどできなかったという場所だったのです。だから望  
まれて高齢者の施設が来た。そういった意味では受  
け入れていただきやすかった地域だったということ  
はあると思います。他の、特養がどんどん建っている  
ような地域に来たとしたらまた違うのかもしれない  
のですが、地域住民の方が欲しくてたまらなかった  
施設が来たというところがあると思います。

**井手** 必要、ですね。でも子どももそこに一緒にい  
る。東京的感覚では、親は絶対にはやがると思うの  
です。自分の子どもを教育する場があつて、そこに  
障害児がいる、あるいは認知症のお年寄りがあると  
いった時に、子どもの教育にとってはマイナスだとい  
う発想がすごく強いと思うのですが。

**大島** それに関しては、今のところだけかもしれませ  
んが、特にクレームもなければ、それはむしろ良いこ  
とだし、もっとどんどん交流してくださいということで、  
デイサービスのお年寄りが手話を教えに行ったり、  
一緒にお散歩に行ったりしています。それは、歴史的  
に三世代同居が多かったことと関係していると思い  
ます。排他性の一方で、それは富山の力でもある。

**井手** 常に家のことがあつて、おじいさんおばあさ  
んがいてお父さんお母さんがいて子ども達がいると

というのが望ましいという。

**大島** そういうこともあると思います。お母さん世代  
は、自分自身は三世代同居だったけれど、今は別居  
しているということで、別にお年寄りがそばにいるこ  
とに関してはあまり違和感がない。

**井手** おもしろいですね、富山型デイサービスにも  
そういうところがある。皆一緒にというのが。その哲  
学、風土のようなものがあるのですね。

**大島** まだ間に合ったというところだと思います。も  
うちょっと都市化が進んだ状態で今のようなものを  
つくったら、もしかしたら反対した人が出てきたのか  
もしれませんが、まだギリギリ間に合うタイミングで  
複合施設ができたのではないかと思います。

## 農山村と都市部ではニーズも危機も違う

**井手** 同じ都市でもやはり違う。タイミングもある。  
過疎地域もそうですね。伊藤さんの神山町はすごい  
リーダーがおられる。他方で西粟倉村は、私が知る  
限りリーダーとおぼしき方は、井筒さんがリーダー  
かもしれませんが、ちょっと違う感じですよ。リー  
ダーがいる場合と、それがなくともうまくいくという場  
合とで、その違いはどこか。何が原因なのでしょう。

**伊藤** 神山町の場合、NPO法人グリーンバレー  
理事長の大南さんが前面に出ることが多いのは確  
かですが、彼らが使っている「浮遊するリーダーシ  
ップ」という言葉があります。グリーンバレーは今でこ  
そまちづくりを牽引する組織のように見えますが（も  
ちろん事実としてそういう側面はありますが）もともとは  
同年代のおじさん達が集まってできた集団です。  
一度町の外に出て戻ってきて、「この町つまらない  
ね」という感じでいろいろ始めたのがNPOになつて  
いったそうです。それぞれにキャラがあつて、得意な  
ことがあつて、でも基本的にはフラットです。「信ちゃ  
ん（大南さん）は喋るの得意だから、外でカマしてこ  
いや」とか、でも町の中でのちょっとした出来事を世

話するならこの人だよ、とか、それぞれ得意なところでリーダーシップを発揮しています。

これを頼むなら大南さんじゃなくて佐藤さんだよ、ねというようなことは、まちの人が何となく分かっているところがある。大南さん達が地域活動を始めた時に、やはり最初は全然うまくいかなかったとか、親世代から「そんなの意味ない」と言われて意見が合わなかったとか、どこにでもある問題がやはりグリーンバレーにもあったそうです。それが、サークルのノリ、部活のノリで、皆がわいわい楽しくやっていったから続けてこられたということ、大南さんは言っていた。本当に彼が全部リーダーとしてすさまじい牽引力でやっているかという、そういうリーダーシップではないと思います。だから妙な使命感があるわけではなく、自然体で、皆さんとても楽しそうなのが印象的です。

**井筒** うちが多分行政がすごく頑張っている。村長はむらの人なのですが、ビジョンはあるが強烈なリーダーシップではなく、やりたい人をどんどん応援してくれるタイプ。産業観光課というアクセル部門の部署が事業については引っ張っている。セクショナリズムがない。林業、観光、農業、エネルギーを全て一つの課でやっているから、それは重要です。その課長がそれでぐいぐい攻めることができ、彼などはどんどん東京に行くタイプです。

一方で誰が事業をまわすのかという民間なわけですが、西粟倉・森の学校という会社があつて、牧大介という元コンサルで40歳のスーパー社長がいて、彼がどんどん人を呼んでくる。大南さんは地元の人だけれど牧さんは外の人。出自は違うけれどキャラは似ている。その中で20人くらい雇っていて、その会社も含めて15社くらいベンチャーが生まれている。そうやって民間企業がここ数年で出てきている。社長は地元の人もいればよそ者もいて総じて若い。

**井手** 伊藤さんの自主的・勝手にやっているという話があつたし、大南さんの話も自分達が楽しかったからやっているということだった。井筒さんも誰かの

リーダーシップで動くのではなくて、行政のある人だったり、民間のベンチャーの社長さんだったり、皆が自由にやっていくなかで勝手にうまくいく。そういうイメージがすごく強いですね。

そうだとすると、中島さんと大島さんの世界、社会変革しなければならないというような、私達が変わらなければならないという、楽しくやってるよね的世界とは違いがあるような気がします。それは都市と農村の違いなのか、あるいは業種の違いなのか。

**大島** やはりアクセル部門なのです、お二人は。こちらはとにかくディフェンシブな領域。人の尊厳や生命を守る。

**中島** それが毀損されている人達の権利や暮らしをもう一度復活させるというか、守っていくということだし、私達がやっているのは、人間が抱えている困難を地域の人達と共有する。ここにこんな困難がある。しかしこれは皆さんの暮らしにも直結する問題ですよ、ねというかたちで、可視化していくことをやっている。

パーソナルかソーシャルかという議論では、そもそもソーシャルワークはパーソナルから始まる。個人の支援を突き詰めて考えていくと、社会変革が必要なのだというところで、そういう道筋もあるし、もっと言えば社会構造を捉えて個人の暮らしを見ていくという。

**井手** 整理しましょう。農村では、強い危機意識の一方で、パーソナルに楽しいことを皆でそれぞれにやりながらうまくいくというケースがある。それと比べると都市部では、命に関わる問題が重要で、同時に、社会を変えねば、社会にこんな問題があつて何とかしなければという、ソーシャルな問題意識が強く、その中で頑張るという話を前提にしている。でも、ソーシャルなことを考えているお二人も、日常はパーソナルな関係の中でパーソナルな何かを実現すること、その延長線上として社会的なことを考えている。

ここをもうちょっと詰めたいですね。社会と個の

関係。例えば、社会のこういう構造の問題があつて人びとのささやかな日常が犠牲になっているという例はありませんか。

**中島** 認知症の独り暮らしの方がいたら、地域の方が、認知症の独り暮らしだから火事でも起こしてもらったら困るとか。よくあるのはごみ出しトラブルです。地方都市はごみの分別がありますから、ごみの分別を間違つてトラブルを起こす。そうすると、地域の人達は、早く施設に入ってもらった方がこの人のためにも良いのではないですかということを私達に言ってきたりするわけです。私達社会福祉実践家としては、コンパクトシティ論は思想的に真逆で、その人の自己決定を尊重するわけですから、その地域で暮らし続けたいとその人が思っているのであれば、それを支援していくのが仕事だし、それがその人の尊厳を守るということに繋がるわけですから、その人がその地域で暮らしていきたいとお思いであれば、私達はそれを代弁しながら、地域住民の方に理解や協力を促すというアプローチをしなければなりません。そうやって、地域の方からクライアントの排除行動が出てきた時には、私達は介入し、そこを変えていかなければならないということがあります。

**井手** 本当は自宅で死にたいと思つていても、ごみ問題あるいは家族の介護労働の問題、医師の判断、いろいろなものがあつて、結局、自宅で死にたくてもそういう施設に行くしか選択肢がないような状況に追い込まれていくとするならば、そのパーソナルな人の幸せを願うためには、社会の構造を変えていかなければならないというイメージでしょうか。

**中島** 一つは人と人とのつながりです。共同意識や信頼の基盤が脆弱化している。伊藤さんもおっしゃったように、当然コミュニティというのは煩わしいという側面があるから、どうしても関わることを拒否してしまう。関わらなくて済むならば関わらない方が良いという形です。

しかし、関わらなくても良いとなつていくと、そこだけでは終わらない。負の循環が始まってしまう。関

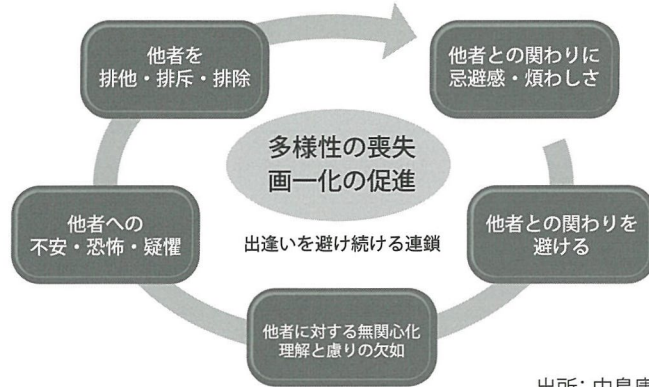
わらないことによつて他者に対する慮りがなくなる。無関心化が進む。その先には不安と恐怖がある。認知症の人は何をするか分からない。障害のある人とどうして接して良いか分からない。その次は排除だと思ひます。対立は出会いがあつて対立があるので、対立は別に悪いことではないと思うのですが、そもそも出会いを避けることが排除に繋がる。そういう負のスパイラルの中にある。その負のスパイラルを真逆に戻していく。煩わしいのだけれども、やはり関わるのが大事なのだ。そしてそれを地域住民の方々に、体験的に主体的に活動に参加してもらうことによつて理解の促進を図っていく。

**井手** 普通の人びとは、過疎地域や農山村の方がはるかに深刻な危機に直面していると思つている。けど何か農村の話が生き生きして、一方で、都市の方はそういう危機が目の前にないから、だから排除したり関わらなかつたりということになつていく。危機が見えにくいことによつて。

**大島** 認知症のお年寄りと一緒に、障害者の方も選択肢が全くなくて、何かある制度に乗つかれば死にはしないという制度は整っているから、それで良いでしょうという感じになつている。失敗する自由がないというか選択肢が示されていない。しかも、働かなくても障害者年金がもらえて暮らせるから良いじゃないかという形になつている。しかし、本人は全く自由を感じていないということが起きているのは、成熟した人間社会としてはどうなのかなというところがあつて、それは認知症や介護の問題も同じだと思ひます。

**井手** 鋭く目に見えて危機があらわれている方が、連帯しなければとか、助け合わなければとか、厭なこともやらなければとか、今までであればよそのものは排除していただけれど、やはり入れなければとか、新しい公共性、正確には新しい「共」をつくっていく動きが起こる。都市部は本当にそれが起きにくいかもしれません。

「軋轢と対立」は出逢いに依拠しているため排除とは異なる。



出所：中島康晴作成。

**大島** 人口がたくさんいて、代わりがきくと思っているのかもしれませんが。しかし農村などは、その人がいるかないかが重要だということがあって、その人に何か起きたら皆が支えてあげないと、それは結局自分に跳ね返ってくるという意識があるのだけれど、都市はそれがなくて、いなければいいで別に良いやという感じなのではないでしょうか。

**伊藤** 都市部では、計画なり制度なり仕組みに添った方が合理的に運営ができます。しかし過疎のまちは、日本がこういうふうになっていくぞという計画や制度の中で、気づいたらそれによってダメな状況になっちゃったという、計画の失敗みたいなものが積み重なってできている場所だという見方もできる。なので、ソーシャルな計画に添いきらず、パーソナルに振る舞った方がむしろ合理的という局面も多い。これから都市部でも、人口は減っていきます、税収も減っていきますという時に、今まで機能した計画はちょっとずつうまく機能しなくなっていくかもしれない。田舎の人達が計画から外れたところで何をやっているかというのは、都市部にもフィードバックできるような参考事例になり得るのではないかとことをすごく感じています。

### 社会変革と経済効率性は矛盾しない

**井手** 私達を感じている閉塞感みたいなものと同時に、改善の兆し、変化の兆しも見えるというのが分かってきた気がします。ただ、日本社会全体を

覆っている不安は、結局経済的豊かさだと思うのです。どんどん貧しくなっていく、生活が維持出来ないという緊張感。おそらく、普通の日本人が皆さんにまず期待するのは、「儲かりますか」ということだと思います。それはどうなのでしょう。皆さんが取り組んでおられることで、地域のいわゆる活性化とか雇用の創出とか、そういうことにどういう影響があるかお話しいただけますか。

**中島** 私達の業界で大切なのは関係性の継続です。地域の住民を基本的には雇用する。うちの法人の場合、設置されている施設の市内の職員しか採用していませんが、必然的にそうなる。6割くらいは同じ中学校校区に住んでいる従業員を雇用している。それはどういうことかという、その方が地域に対するいろいろなアプローチがしやすい。地域の情報が放っておいても入ってくる。だから地域住民と関係を結びやすいという良い側面もある。一方、その職員が退職したら、どういふ噂をばらまかれるのかとか、施設の個人情報が入外に漏れてしまうという問題がある。また関係が悪くなると、私達も運営しづらくなるし、辞めた人達も暮らしづらくなってしまいう問題がある。

であればこそ、すごく丁寧に職員と向き合わなければならないということも出てきますし、仮に退職しても、うちのイベントに家族ぐるみで退職した職員がイベントに参加してくれたりするわけで、つながりの継続性というところにはすごく役に立っているのではないかと思います。

つまり、普通の公共事業は、単年度から3ヶ年とか、その年数が終わったら終わりです。民間企業が、公共事業を受託してその地域でいろいろな活動をしたとしても、わずか3年間のおつきあいで、はいさようならとどこかへ行ってしまうわけです。私達は地域に根ざして、そこからもう逃れられない状況で事業を展開しなければなりません。職員や地域住民と継続的な関係を結んでいかねばならない。その関係の継続力みたいなものが地域活性化の基盤になる。

以上の「継続的な関係」が生み出すのは循環型の経済です。私達の事業は社会保障ですから、市町村からお金がおおりてきます。市町村からおりてきたお金、そして利用者の方の利用料金負担があるのですが、利用者の方も中学校区内の領域に住まわれている方がほとんどですから、収入源は地域からのものになる。働いている人達も地域の人達ですから、働いている人達に支払われる給料が地域の業者にお金が落ちていく。お金が地域循環型なので、経済を地域で循環させている。当然関係性も循環させていますから、外資とか地域の財源が地域外に吸い取られていくということとは全く違う話なので、地域の経済基盤を守っている。

**大島** 私は福祉ですから大もうけはできませんと正直に言うしかないと思っています。ただ、その安心感が、結局は日本の安心しながら働くということの基盤になっているのではないかと思います。その事業自体は大もうけできないようになっているのだけれど、でも安定的な生活の社会基盤がつくられている。この基盤がなければ安心して働けない。

それから、シフトの仕事だから、この時間だけ働きますよということもできるので、ワークシェア的な部分もすごくある。子どもがいる人も働ける。特にうちは保育園が近くにあるから、預けて働く方もいらっしゃるし、もちろん預けて他の企業に行かれる方もたくさんいますが、そういった部分では、働くことを応援している部分がある。介護離職の方もいらっしゃるの、それならばここにお婆ちゃんを預けて働きましょうという。

**井手** WIN-WINですよ。事業所としても儲かるし、お客さんは増えるし、その人も離職せずに働ける。

**大島** ものすごくGDPを増やす方向に動くというわけでもないと思いますが、結果的に、その事業自体では増えないけれども、成長に繋がっているという部分はあると思います。

**中島** 大事なのは社会にマイナスを生み出さないという発想点です。介護離職は年間10万人いる。例えばケアペナルティ。生涯女性が子育てのために働けない期間を考えると、1億2,000万円くらいのケアペナルティがある。それをゼロにしていける。目立たないけれどもマイナスを減らす効果がある。

**大島** 今度やる放課後の障害児支援についても、小さい頃から発達障害等の子を支援することによって引き籠もりを防ぐ。そういう人達を社会に出て税金が稼げる大人にするという部分で、マイナスを減らすという役割がある。私は自分の子どもを税金が払える大人にするということが目標で子育てをしているところがあります。

**井手** 今のお二人の話は、何か「公共」事業的イメージがあって、それはハード型、土建国家型の公共事業ではなく、新しい形での公共事業というか。行政がお金を出すわけですからね。その財源は皆さんが負担される。しかもそれは土建業だけではなく雇用を増やしていく。地域循環型の側面もあるし、一方で仕事やお金が劇的に増えることはなくとも、マイナスを減らしていくような側面もある。納税者をさらに増やすことにも繋がる。

**大島** 介護保険にせよ、元気なお年寄りがそのままぼつくり逝ってくれば介護保険料も減る。高齢者の場合は重たくしないという部分がある。元気を維持すれば介護保険料も少なくて済むし必要な社会保障費も減るといいう役割はあるのではないかと思います。今政府は、社会保障費を減らそうとして介

護報酬を減らしたりしていますが、そうではなくて、皆介護のお世話にならないように維持すれば良いではないか。結局そこに使われるお金が減らせます。

それにくわえて、保育についてもできるだけその子の能力が発揮されるように応援してあげれば、最終的には稼ぐ大人になるだろう。未来への投資のようなところもある。その中で、お年寄りが近くにいるから、社会の中で弱い立場の人も世の中住んでいるのだという意識を持ちながら大人になるということも意味がある。

**井手** 納税や負担の面でも「知る」ことで共感の基礎を作る。

**大島** 運、不運というか、自らの責任でなくこういうことになる人もいるということを、意識しながら大きくなるかならないかというのは、すごく大きいと思っています。今政策を考えている人は、多分東京生まれ東京育ちの人が多くて、地方のことを知らずに「地方創生」とか考えているのかなというところがあるので、やはり体験は必要だと思っています。無駄な動きをしている人の存在意義をあまり考えていないし、信じられないのでしょうか。でもそれはコミュニティとか日本社会をつくりあげている一人ひとりなのだから、そういうのを大事にする日本になってほしいと思っています。

**井手** それができたらまさにソーシャル・イノベーションですね。

**伊藤** はじめて神山町にサテライトオフィスをつくったSansanという名刺管理をやるベンチャー企業があるのですが、彼らがオフィスを開設する際、どうやって町に入っていっていったら良いのかを考えたというのです。そこでグリーンバレーに出向いて「何か出来ることがあったら言って下さい。おばあちゃん向けのパソコン教室とかできますし、テレビくらいなら直せるかも」と言ったら「そんなことは何も気にしないでいい。この場所であなた達の事業がちゃんと成立することを証明してくれればそれで良い」と言わ

れ、肩すかしを食らうというか、肩の荷が下りるとい  
うか、とにかくそんな体験をしたことを、社長さんから聞きました。

そうやって、人を受け入れていくということに対し  
て余計な圧力を与えないということが、良い循環を生  
む大きな原動力だと思います。結果的にだんだんと  
オフィスが増えていって、今11社あるのですが、これ  
だけ増えたということが、企業運営や経済活動に、何  
かしら合理性があるということの一つの証左かなと思  
います。

実際そうなってくると人が増えてくるから、飯を食  
うところがないじゃないかということで飲食店が出て  
きたり、飲食店をやるんだったら、そこで使う野菜は  
ここに野菜をつくっている人がいたよねということで、  
まちの畑から野菜を買ってきて、それを調理して出す  
お店ができたりする。農業を改革するということと  
すごく難しかったのだけれど、現実的に経済活動に  
農業が組み込まれ始めています。オーガニックフード、  
というようにまちの農家の方も違った喜びを発見し  
始めている。

私も今手掛けている宿泊施設で、町の山から切り  
出した丸太材を使っているのですが、それもこの現象  
の林業版かな、と思っています。農業とか林業とい  
った、経済的にコミットするのが難しかったところに  
少しでも循環が生まれはじめています。

しかも、誰も農業や林業を活性化させようとは思  
っていない。モチベーションとしてそれはなかったの  
だけれど、結果的に循環の中で波及効果が生まれ始  
めている。「儲けよう」といった時に、東京なら東  
京なりの戦略の立て方があるけれど、田舎には田  
舎なりに、儲けるための戦略となるような特徴があ  
ると思っています。田舎に行けば儲かるというわけ  
ではないけれど、こういうミッションでこういう会  
社を運営しようという戦略を立てるためのフックは、  
結構たくさんある。儲けるために田舎という環境が  
役に立つことはたくさんあると思います。

**井筒** 林業については、やれば儲かると思います。  
日本は森林面積が66パーセントもあってたつたの  
6万人しかいないというのは少なすぎる。ちゃんと自

分達で経営するというのをやれば良いのです。雇用されるという働き方ではなくて、林業ベンチャーとして入っていけば全く隙間だらけです。四国で多いのですが、最近30代の人達が林業をはじめている。地域おこし協力隊制度を活用しながら入ってきてやっているところもあり、すごく若い林業経営者が増えている。

林業は作業道を入れて木を出せば絶対お金になるのです。道を入れるだけで例えば1メートル2000円の補助金がつく。作業道は、1日30メートルくらいできるので、6万円くらいの売り上げになる。ユンボで道をつくるのですが、めちゃくちゃ難しいというわけでもない。僕が実際に開設したときは、1ヶ月で400メートルつくって60万円(1500円/m)です。出てくる木も売れる。補助金も入る。年500万円くらいの収入ならば普通にやっていれば出ます。

また、田舎には労働流動性というか、いろいろな仕事ができるしまうということがあると思います。都会であれば他に転職しづらいというのがありますが、田舎者はどんどん転職もできるし、簡単な仕事が多いので、林業をやりながら夏は米づくりもできる。企業レベルでも、私は宿泊業なんかやったこともないのに温泉業をやろうとしているし、そこに行政のサポートがどんどん後から入ってくる。補助金があるからやりますというのではなくて、私がやりますと言うと、こんなのがある、こんなのがあったらとどんどんもって来てくれる。

企業としては、規模ではなく一箇所のエリアでいくつもやった方が良いという「密度の経済」。田舎ではそれができるから、そういう気持ちでやっています。

それから、西粟倉村は、合意形成しすぎないということを書いて、事業をちゃんとやろう、事業をちゃんとやることによって皆が認めてくれるということがある。あまりやる前からこういうことをちゃんとやりますということを言うのではなく、やりきってしまう。ある程度の根回しは行政がしてくれるのです。だから政策的にも後押ししてくれる。

**大島** それは小さな地方公共団体だからですか。大きくなるとすごく時間がかかる。

**井筒** 「聞いてない」問題については行政がちゃんとやってくれるのです。15社のローカル・ベンチャーがある中で、障害者福祉のNPOが立ちあがったりしている。今言ったようなアクセラ部門でない部門でもベンチャーと言っています。

**井手** 人口1500で障害者の福祉NPOができるのですか。

**大島** 外から引き受けるというのもあると思います。居場所のない引き籠もりの人などに木と対話する仕事、つまり人と接しなくてもよい仕事をやるだけでちゃんと収入になるという体験をしてもらう。人と対話が上手じゃない人でも、森はウェルカムだと思えます。きっと。

**井筒** 誰でもできる仕事、最初は薪割りとかやって欲しいと思ったりするわけです。組み合わせられないものかと思っています。

**大島** いま福祉と農業のコラボはすごく注目されていて、ひたすら草むしりをするのが得意な人達もいるから、そういうのは農村の方がやりやすいだろうなと思います。

**井手** うまく行っているところはね。逆に、本当の過疎地域で、高齢化が進みすぎて仕事はあっても働く人もいないということもありますよね。そこは難しい。

**井筒** 人口が全体的に減っているけれども、若い人も相対的に減っていて、高齢者だけで絶対量を維持しているのだから、若年層が減っているだけに仕事の需要はここ2、30年間全く減らないということです。

## 農村と都市では人間の価値が違う

**井手** 垣根を無くしていく。境界をなくしていく。見えるということの意味はそういうことですよ。だか

ら、何かを分かち合うことも大事だけれども、そもそも知ることの大事さが強調されたと思います。

それから、ソーシャル・イノベーションと言ったけれども、ソーシャルなものやパーソナルなものとの関係、ソーシャルの方に力点を置く活動家もいれば、パーソナルなものにも置く。しかし、ソーシャルに力点を置きつつも、パーソナルなものは基底にあるような。ソーシャル・イノベーションと私達は言うけれども、その根本にパーソナルな関係があるというのはおもしろい発見だと思いました。

また、ソーシャルにはもうひとつあって、社会と経済の関係と言うべきでしょうか。私達は、経済の問題は経済のこととして考える癖があるけれど、そうではなく、本当に経済的に上手にやっていると、社会的基盤がなければ無理。都市部にはそのソーシャルなものが非常に弱いから、しかも第三次産業、サービス産業みたいなものばかり人口を頼りに集まってきていて、裾野が狭く波及しない。その中で都市が苦しんでいる感じがある。しかも人間はまだどんどん都市へ行っている。そういう、ソーシャルなものと経済的なものとの関係、特に、ソーシャルなものが土台にあって経済的成功が導かれるというのもおもしろいと思いました。

それと行政のセクショナリズムの問題と同時に、今度は行政が上手に関わってきた時の成功体験もある。

**大島** 経済効率とは別のところで、行政の人が推進してくれることで大きく変わる。ソーシャル全体を変えようと思った時には。

**井手** そういうのは何と言ったら良いのでしょうか。民主主義の効率性でしょうか。支配の効率では良くないのですが、行政がセクショナリズムをもっと超えていくことが大事だし、一つの課でいろいろやるような本当の意味での「総合行政」的側面も強めていかないと。

**伊藤** いわゆるソーシャルな仕組みや制度とパーソナルな活動を繋げていくきっかけは、おそらく行

政にしかできない。行政というどうしてもソーシャル側に重心があるように感じてしまいますが、もう少しパーソナルとソーシャルをつなぐ、そういう活動領域のひろがりが出てくると、「あとは任せた」と行政が言ってしまうても良い事例がたくさん出てくる。特に小さなまちだと、役場の産業振興課の課長も隣のおじさんだったりするわけで、その距離感がうまく機能していると思います。

**井手** 結局話は最初に戻るわけですね。関係とか、わかっていること、知っていることが基礎になれば、ものごとは効率的に動いていかない。都市部の今の葛藤はそこにあるのかもしれませんが。

**大島** 安心感だと思うのです。1500人規模の自治体なら産業振興課の課長が隣のおじさんで、この人は悪いことをしないなと皆が知っている。だから何を言われても納得できるというところが、動きやすさにつながるのかもしれない。知らない、皆が不信感を持ってしまっているから、何か変なことをされるのではないかという気持ちになるというのが寂しいですね。

**井手** 「人間の価値が違う」ということ。ああなるほどと思ったのだけれど、つまり人間というのは本来総合的な生き物でしょう。私だって学者をやっているけれども学問だけで生きているわけではなくて、酒だって飲むし、音楽だってやる。人間は総合的な生き物です。その人間の本来の資源、総合性が、都市では全く発揮できないのだけれど、農村に行った時には、むしろ人間の様々な局面が、いろいろな仕事や役割に結びついていて、総合性が発揮される。役所もそうです。だから一人の人間の価値が違ってくる。都市でひとりの人間の価値をどう高めていくのかが大事だし、そこを意識している大島さんや中島さんは目に見える成果を出している。大きなヒントをもらった気がします。

(座談会は、2015年3月24日、慶應義塾大学で行われました。—編注)